

NASU INTERPRETATION's ACTION

NASU INTERPRETATION's ACTION
那須インタープリテーション's アクション

那須インタープリテーション's アクション

2026-2027 Version_02



目次

① 火山の物語	07	② 水の物語	25	③ 人の物語	35
1400年の湯のストーリー	08	清流のはじまりのストーリー	26	千年の祈りのストーリー	36
大地の記憶にふれるストーリー	12	めぐり、めぐって、この一粒のストーリー	30	物語が交差する道のストーリー	40
山の咆哮のストーリー	16			色とりどりの糸のストーリー	44
父と母なるストーリー	20			風景に刻まれたストーリー	48
				2つの開拓のストーリー	52
				一皿に込められたストーリー	56
				心に届ける体験のストーリー	60
				惹きつけあう人々のストーリー	64
				居心地の良さのストーリー	68

ストーリーを伝えるための、重要な資源とテーマ
 那須を好きになるストーリー集を活用してこんな風になって欲しい

④ 御用邸の物語

愛された那須のストーリー	74
インタープリテーションとは	78
那須地区におけるインタープリテーションの目的	79
何故、ストーリー集なのか	80
アーカイブ	81
那須で計画関係団体・関係者	82

地域の人からは、「なす爺」と呼ばれている。
 那須生まれ・那須育ち。年齢不詳。
 この地の成り立ちや風習まで、
 「何でも知っている地域の生き字引」。
 シャイだが話し好きで「那須のストーリー」を
 語らせたなら右に出るものはいない、らしい。



なす爺

なす爺の着せかえ

表紙のなす爺を切り取って、
 冊子の中の洋服で着せ替えてみよう！



ストーリーを伝えるための、 重要な資源とテーマ

那須を好きになるストーリー集における資源とは、その場所が持つ特別な価値や魅力を伝えるための重要な要素のことです。それは目に見える自然や建造物だけでなく、その場所の歴史や文化、人々の営み、そこで起きた出来事など、目に見えないものも含まれます。これらの資源は、単独で存在するのではなく、互いに深く関連し合い、その地域ならではの特徴を作り出しています。

テーマ(各項目のタイトル)は、これらの資源が語る物語の中心となる考えや概念のことです。それは単なる事実の羅列ではなく、その場所の本質的な価値や意味を表現するものです。テーマは来訪者に深い理解と感動を与え、その場所との個人的なつながりを見出すきっかけとなります。

那須エリアを4つの項目に分けた理由は、この地域の本質的な特徴を、分かりやすく、かつ深い意味を持つ形で伝えるためです。

「火山の物語」と「水の物語」は、那須の自然

環境の核心部分を表しています。これらを2つに分けたのは、火山活動によって形作られた地形と、そこから生まれる温泉や湧水が、それぞれ異なる、しかし密接に関連した物語を持っているからです。火山は那須の大地の形成と変化を語り、水は生命と暮らしの源としての役割を持っています。

「人の物語」は、この自然環境の中で人々がどのように暮らし、文化を築き、地域を発展させてきたかを語っています。これは火山と水の物語と切り離せない関係にあり、自然と人間の共生の歴史を示しています。

「御用邸の物語」を独立した項目としたのは、皇室との関わりが那須の歴史と発展に特別な影響を与え、地域のアイデンティティの重要な部分となっているからです。これは単なる建物の歴史ではなく、那須という地域の価値が高く評価され、大切にされてきた証でもあります。

これら4つの物語は、それぞれが独立しているようで、実は深く結びついています。火山

活動が生み出した地形により恵みを受けながらも人々は努力をし、その努力によって得られた水が人々の暮らしを支え、そして地域の魅力が皇室にも認められた。それこそが地域の誇りとなっている。このように、4つの物語は互いに響き合いながら、那須という場所の豊かな個性を形作っているのです。

このように物語を整理することで、来訪者は那須の持つ多面的な魅力を理解しやすくなり、また地域の人々も自分たちの地域の価値を改めて認識することができます。



このストーリー集が生み出す新たなつながりは、那須の魅力をさらに広く深く伝え、訪れる人々がこの地を愛するきっかけとなるはずです。私たちは、その未来を信じ、地域全体が一つとなって新たな物語を紡ぎ続けていきたくと願っています



観光業

このストーリー集が生み出す新たなつながりは、那須の魅力をさらに広く深く伝え、訪れる人々がこの地を愛するきっかけとなるはずです。私たちは、その未来を信じ、地域全体が一つとなって新たな物語を紡ぎ続けていきたくと願っています

宿泊業

滞在を通じて那須の魅力を感じてもらおうおもてなしとして。地域に根ざした温かなサービスで、訪れた人々が那須の人々の暮らしや文化に触れ、心地よい時間を過ごせるようになるためのアイデアとして。

飲食業

那須の恵みを味わい、その背景に想いを馳せる食事。地元の食材を使った料理を楽しみながら、その食材が育まれた風土や季節の移ろいを感じられるようにするために。

那須を大好きになるストーリー集を活用してこんな風になってほしい

農業・地場産業

生産品の特徴を表すための物語の構築に。また那須の自然とともにある暮らしを共有し愛着を持ってもらうために。地域の産品や手仕事を通じて、那須で培われた知恵や技が伝わり、訪れた人々がその価値を感じ取るきっかけに。

サービス業

日常の中で那須の魅力をさりげなく。接客やコミュニケーションの中で、那須の美しさや文化が自然と伝わり、訪れる人々の心に響くように。

教育関係

那須の自然や文化を学び、未来へとつなげる機会を創出するために。次の世代が地域への愛着と誇りを持てるように。体験活動や交流を通じて豊かな感性を育み、那須との深いつながりを感じられるように。

このように、各業種がそれぞれの場面で那須を大好きになるストーリー集を活用し、那須の資源をつなげて伝えることで、訪れる人々に那須への深い愛着を育んでもらいたいと考えています。そして、地域の魅力が最大限に引き出され、那須を訪れる人々が増え、何度でも足を運びたい場所へと成長していくことを願っています。



① 火山の物語

自然の圧倒的なポテンシャル



なす爺は温泉好き。
那須に6つある異なる泉質の温泉に日替わりで入浴するのが常。浴衣も手拭いをいつも肌身離さず持ち歩く。那須の温泉を語らせたなら右に出るものはいないらしい。

那須を大好きになるストーリー集





① 火山の物語

那須の火山が1400年休むことなく生み出す六つの泉質は、色と香りと温もりで訪れる人々を癒す地球からの優しい贈り物である。

1400年の

湯のストーリー

肌を包むやわらかな湯気の向こうに、この地の深い呼吸が聞こえてくるようです。いまあなたの身体を温めているこの熱が、はるか昔、1400年も前から絶えることなく湧き続けている地球からの贈り物だと知ったら、どんな気持ちがするでしょうか。

那須の地下深くでは、巨大な熱の源が決して眠ることなく、今この瞬間も活動を続けています。それは時として荒々しい顔を見せる火山。しかし、ここでは人々の心と身体をそっとほぐす、慈愛に満ちた表情を見せてくれます。太古の地層をくぐり抜けて地上に現れるとき、その恵みは一つではなく、6つの異なる泉質という、まるで個性豊かな処方箋となつて私たちの前に届けられるのです。それぞれに異なる色、香り、そして肌ざわりで、訪れる者にそつと寄り添います。

その昔、傷ついた二頭の白い鹿が、谷の奥深くで傷を癒していたという伝説が残る湯。それが、この地と人との長い物語のはじまりでした。以来、天下を治めた武将も、風に吹かれて旅をした俳人も、そして名もなき多くの人々も、時代を超えてこの火山の温もりに身を委ねてきました。それぞれが抱える疲れや痛みを、この湯は静かに受け止めてきたのです。それは、人の営みがどれだけ変わろうとも、変わることなく恵みを与え続ける火山の、大きな優しさなのかもしれません。

あなたがいま浸かっているこの温泉は、1400年という時間を超えて、無数の人々の想いが溶け込んできた場所でもあります。6つの泉質を持つそれぞれの色と香りと温もりは、あなたの心と身体に、どんなふう語りかけてくるでしょうか。目を閉じて、那須岳の奥深くから届く温もりを感じてみてください。それは、あなたという存在が、この那須岳の壮大な営みと、そして人々の長い癒やしのお話の一部になった、確かな証なのですから。

テーマの目的

火山が1400年という長い時間、休むことなく活動を続けていることを理解する。その継続的な活動が6つの異なる泉質を創り出していることを認識する。色、香り、温もりという五感で火山の恵みを感じられることを知る。温泉が火山活動による「地球からの贈り物」という壮大な視点を持つ。



物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きかかったのは、単なる温泉の紹介ではありません。来訪者が体験する「温泉に浸かる」という行為の背後にある、壮大な時間の流れと地球の営みです。那須の温泉の温かさが、二過性の心地よさではなく、二四〇〇年間も活動を続ける火山のエネルギーと、同じ湯で癒されてきた無数の人々の歴史とが重なり合った、深い価値を持つものであると感じていただくことを目指しました。来訪者自身が、その大きな物語の連なりの中にある「主役」であると感じられればと思います。

資源の解説

物語の中に登場する「傷ついた鹿を癒した湯」とは、約1400年前の630年頃に開湯したと伝わる「鹿の湯を指しています。那須岳(茶臼岳)は今も活動する火山であり、その地下深くのマグマが熱源となり、染み込んだ雨水や地下水を温めます。その熱水が、地層に含まれる様々な成分を溶かし込みながら地表へと湧き出す、これが那須の温泉の仕組みです。「鹿の湯」は、その中でも火山ガスの影響を強く受けた特徴的な「単純酸性硫黄温泉(硫化水素型)」で、白く濁った湯は、火山という荒々しい自然が命を育む「癒やし」の力をも持つことを象徴する、那須の温泉文化の原点です。そして、この地の恵みは一つではありません。地下を旅する水の経路や深さ、触れる地層の違いによつて、那須温泉郷には「6つの泉質」とも言われる多様な湯が生まれています。日本に存在する主な温泉の泉質は「〇種類」に分類されますが、この那須の地には、そのうち「六つの泉質」が集まっています。これは全国的に見ても非常に多様性に富んだ、稀有な温泉地でもあると言えます。酸性の硫黄泉から、肌に優しい単純温泉、アルカリ性の湯まで、訪れる人の数だけ「処方箋」があるかのように揃っているのです。また、物語にある「武将」源頼朝や「俳人」松尾芭蕉が訪れたという史実は、この地の温泉が時代を超えて人々を惹きつけてきた普遍的な魅力の証でもあります。

感じ取ってほしいメッセージ

地下で休むことなく活動を続ける火山の生命力。1400年という時間の長さ、その間絶え間なく続いていた火山の営み。6つの泉質それぞれが持つ色の違い、香りの違い、温もりの違い。温泉が人工的なものではなく、地球が創り出す自然の恵みであること。火山からの贈り物を受け取る喜びと感謝。

探求を促す「問い」の解説

「6つの泉質を持つそれぞれの色と香りと温もりは、あなたの心と身体に、どんなふう語りかけてくるでしょうか」という問いは、来訪者に内面との対話を促すためのものです。泉質の違いを知識として知るだけでなく、自身の感覚を研ぎ澄まし、「自分にとっての癒やしとは何か」を考へるきっかけを提供します。温泉というきわめて個人的な体験を通じて、火山(自然)と自己との間に特別な関係性を築いてもらうこと。それが、この問いに込めた想いです。

自身が物語となる問い

温泉に浸かるとき、あなたはこの湯は何を語りかけているのでしょうか。もし1400年前の人が隣にいたら、どんな言葉を交わすでしょうか。この火山の恵みは100年後の未来にどのようなことを残すでしょうか。湯けむりの中で静かに自問するとき、あなたの那須での体験は、あなただけの忘れられない物語へと変わっていくはずですよ。



① 火山の物語

テーマを感じられる 資源・体験

6つの異なる泉質の温泉を実際に巡り、色の違い(乳白色、透明など)を目で見る。硫黄の香りや各泉質特有の香りを嗅ぎ、火山の息吹を感じる。温泉に浸かりながら、この温もりが地下の火山から今まさに届いていることを意識する。1400年前の人々も同じ火山の恵みを受けていたことを想像し、時間を越えたつながりを感じる。温泉に浸かりながら、地球が自分に贈り物をしてきていることへの感謝の気持ちを抱く。

一 鹿の湯

1400年近い歴史を誇る、那須温泉の原点。異なる温度の湯船で、古来の湯治文化を体感できます。



一 北温泉

映画の口ケ地にもなった、江戸時代からの湯治場の雰囲気の色濃く残す温泉。



一 那須温泉神社

鹿の湯の発見とともに建立された神社。鹿の湯の発見者である狩野三郎行広も祀られています。



一 殺生石

火山ガスの噴出を間近に感じられる場所。地球の息吹と、火山の物語の源泉を肌で感じることができます。



一 那須十二湯を巡る

酸性からアルカリ性まで、多様な6つの泉質を持つ温泉郷を巡り、それぞれの違いを自分の身体で感じてみる。



那須湯本 温泉街の散策

湯本の町並みを歩き、温泉と共に生きてきた人々の歴史に思いを馳せることができます。



板室温泉 (那須塩原市)

「白湯山信仰」の歴史が残る温泉地。那須連山の恵みが異なる形で届いていることを感じられます。



一 大田原温泉

アルカリ性の泉質が特徴。火山の恵みが広大な那須野が原の地下水脈にまで及んでいることを体感できます。





① 火山の物語

那須岳から麓へと続く起伏は、火山が1億年かけて描いた大地の物語であり、今も噴気とともに新たなページを綴っている。

大地の記憶にふれる ストーリー

あなたの足元に広がるこの大地が、はるか一億年以上も昔、深い海の底だったことを想像したことはありませんか。いま目の前にそびえる山の頂きが、まだ影も形もなかった頃の、静かな海の記憶。那須の物語は、遥かなる時間の中から始まります。

やがて大地は隆起し、巨大な火山が何度も火を噴きました。熱い溶岩が流れ分厚い火山灰が降り積もる。そのたびに風景は描き変えられ、気の遠くなるような時間をかけて、なだらかな裾野や深い谷といった、今の私たちが目にする美しい起伏が刻まれていきました。それは、火山という名の芸術家が、途方もない年月をかけて描いてきた、壮大な大地の絵画なのかもしれません。

そして、その絵画が、今もなお描き続けられています。証拠がああ茶臼岳から上がる噴気です。こうこうと音を立て、硫黄の香りを漂わせるあの息吹は、この物語が過去のものではなく、現在進行形で続いていることを力強く示しています。火山は今この瞬間も、大地の物語に新たなページを書き加えているので

あなた
が今立っているこの場所は、ただの地面ではありません。二億年以上の時間をかけて、地球が綴ってきた壮大な物語の、まぎれない1ページなのです。麓へと広がる起伏を眺め、山の息吹を感じるとき、あなたは、この物語に、どんな続きを想像するでしょう



か。感もた

テーマの目的

茶臼岳を起点として麓へと広がる地形が、火山活動によって長い時間をかけて形成されてきた「物語」であることを理解する。その物語が完結したものではなく、今も噴気を伴いながら続いている進行形の物語であることを実感する。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きたかったのは、那須の地形の成り立ちを解説することだけではありません。来訪者が自身の足元にある大地の成り立ちに想いを馳せ、目の前の風景が一億年以上も続く地球の営みそのものであり、今もなお続いている進行形の物語であることを感じていただくことです。その壮大な時間の旅の最後に、今ここに立つあなた自身がいる。そのことに気づくとき、風景はただの景色ではなく、あなたと深くつながった物語の舞台へと変わっていく。私たちはそう信じています。

資源の解説

物語に登場する「噴気」はこのテーマの核心です。それは、茶臼岳が約1万6千年前から活動を始めた、那須火山群で最も新しい火山であり、今も活動している「証拠」です。茶臼岳は、気象庁が「常時観測対象」に指定する、まさしく「生きている火山」です。その山頂部を形作る「つと」とした溶岩ドームは、室町時代（1410年）の噴火で生まれました。1億年の物語の「最新ページ」を象徴するものとして捉えています。そして「麓へと続く起伏」そのものが、火山が時間をかけて描いてきた「物語の本文」です。このなだらかな裾野は、古い火山の山体崩壊によって流れた土砂や、約30万年前の塩原カルデラの大噴火による火砕流、そして新しい茶臼岳の噴出物などが、何度も積み重なってできた、日本最大級の「複合扇状地」那須野が原です。火山灰や砂礫が厚く積もった大地は、川の水が地下に潜る「水無川」を生み出し、かつては水を得ることが難しい荒野でした。これらの資源は、来訪者が物語の世界と現実の風景とを結びつけるための、大切な道しるべとなります。

感じ取ってほしいメッセージ

那須の起伏を「物語」として捉える視点。1億年という時間の中で、火山が二つの地形を「描いてきた」という創造性。その物語が過去のものではなく、今も「新たなページ」を綴っていること。現在進行形の感覚。噴気が物語の「続き」を示す証拠であることへの気づき。

探求を促す「問い」の解説

「あなたは、この物語に、どんな続きを想像するのでしょうか」という問いは、知識として地形を理解するのではなく、あなた自身の五感で、大地との対話を始めていただくためのものです。山の息吹を感じながら、この大地の未来に想いを馳せる。頭で考えるのではなく、心と身体で感じることで、火山（自然）とあなたとの間に、個人的で、誰にも真似できない特別な関係が生まれます。その感覚こそが、那須での体験を忘れられないものに変える鍵となると考えています。

自身が物語となる問い

もし、この大地が言葉を話すなら、どんな物語を聞かせてくれるでしょう。二億年の記憶を持つこの大地に、あなたはどんな未来の物語を重ねたいですか。噴煙を上げる山の頂きを眺めながら静かにこれらの問いを思い浮かべてください。あなたの那須での一日は、あなただけの壮大な物語のプロローグへと変わっていくはずですよ。



① 火山の物語

テーマを感じられる 資源・体験

茶臼岳から那須高原を見渡し、広がる起伏が火山の物語であることを想像する。ロープウェイや登山道を通じて、標高の変化とともに変わる地形を体感する。噴気孔や硫黄の匂いを体験し、物語が今も続いていることを実感する。那須エリアの様々な場所を訪れ、それぞれが物語の「二章」であることを理解する。

那須ロープウェイ・茶臼岳登山

噴煙を上げる火口を間近に見ながら、今も続く地球の息吹(物語の最新ページ)を肌で感じることができます。山頂から麓を見下ろし、火山が描いた起伏の壮大さを実感できます。



那須高原 展望台 (恋人の聖地)

那須岳から麓へと広がる、火山が創り出した雄大な裾野(起伏)を一望できます。



殺生石

麓にいながらにして、硫黄の匂いと噴気が立ち込める荒涼とした風景の中に、火山の活動が今も続いていることを実感できます。



芦野・伊王野の 古い町並み散策

那須連山より古い火山活動で生まれた「芦野石」を使った蔵や塀が残る町並み。1億年よりさらに昔の、物語の序章に触れることができます。



石の美術館

「芦野石」の採掘場跡に建てられた美術館。石の持つ力強さと温もりを、建築を通して体感できます。



① 火山の物語

那須岳は、地球の鼓動を荒々しい岩肌と噴気で地表に噴き上げ、地球のダイナミズムを一步ごとに足裏から伝えてくれる山である。

山の咆哮のストーリー

耳をつんざくような轟音。大地が、まるで巨大な獣のように咆哮をあげています。足元の岩盤からは、地球の奥深くから湧き上がる熱が、靴底を通してじかに伝わってくるようです。こころは、ただ静かに佇む山ではありません。いま、この瞬間もマグマをたぎらせ、凄まじいエネルギーを噴き上げ続ける、惑星の脈動そのものなのです。

「こつこつとした荒々しい岩肌に手を触れてみてください。これは、幾度となく大地を焼き尽くし、すべてを飲み込んできた溶岩が冷え固まった、破壊と創造の記憶。かつて硫黄を求めた人々が掘り進んだ鉱山の跡は、この圧倒的な自然の力と向き合い、その一部を恵みとして受け取るうとした人間の営みの痕跡です。

山が絶え間なく吐き出す噴煙は、空を覆い、硫黄の香りをあたり一面に漂わせます。

それは、この大地が決して人間の思い通りにはならない、荒々しい魂を保持していることの証。私たちは、その巨大な生命体の前では、あまりにも小さな存在である。ことを、ただ思い知らされるばかりです。しかし、その圧倒的な力の前に立ち尽くすとき、心の奥底から不思議な感覚が湧き上がってくるのを感じるはず。それは恐怖だけではない、生命の根源に触れたかのような、荘厳な感動。地球の鼓動が、あなたの身体を震わせ、忘れかけていた野生の感覚を呼び覚ますのです。

テーマの目的

那須岳は地球が生きていることを実感できる山であることを知る。自分たちが立っている大地が火山が現在進行形で活動していることを地球のダイナミズムとして実感してもらう。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語は、来訪者を穏やかな自然鑑賞の客席から引きずり出し、地球という劇場の、荒々しい舞台そのものに立たせることを目指しました。ここでは、那須岳は圧倒的な力を持つ、畏怖すべき存在として描かれています。その力の前に立つことで、人は自らの小ささを知り、同時に、そのような巨大な営みの一部であることへの感動を覚える。この物語は、来訪者が自身の内なる野生と出会い、地球の鼓動と共鳴する、そんな瞬間を生み出すための序曲です。

資源の解説

「ゴォー」という轟音を立てる「噴気孔」の風景は、このテーマの核心である火山の「圧倒的なパワー」を最も雄弁に物語る資源です。これらは、ただ見るだけの対象ではありません。その音を聴き、その熱を感じ、その香りを嗅ぐことで、来訪者は五感のすべてを使って火山の力と対峙することになり来訪者を物語の「主役へと変える、強力な触媒となります。そしてストーリーにも登場する「鉱山の跡」もまた、このテーマを深く体感する資源です。那須岳の硫黄鉱山の歴史は古く、江戸時代には火薬の原料となる硫黄やミョウバンが採掘され、黒羽藩から幕府へ献上されてきました。人々は「山の咆哮」の中で、その恵みを命懸けで採掘してきたのです。掘り出された硫黄は「土橋(どぞり)こと呼ばれるソリに約600kgも積まれ、多くは夫婦が息を合わせて麓へと滑り下ろし、空になった重い轎は牛が山へと引き上げました。荒々しい火山の力と向き合い、知恵を絞り、動物とも共生しながら生きてきた人々の逞しい営みの跡は、この大地が持つもう一つの「パワー」を私たちに教えてくれます。

感じ取ってほしいメッセージ

地球の生命力。地下で脈打つエネルギーの存在。火山の圧倒的な力。自分が生きた大地の上に立っているという実感。地球の鼓動と自分の鼓動のつながり。火山の持つ原始的なパワー。自然の壮大さへの畏敬。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後に、あえて問いを投げかけていません。それは、このテーマが求める体験が、内省や対話よりも、言葉や失うほどの「圧倒的な感覚」そのものにあるからです。問いかけるまでもなく、大地がその轟音と熱と匂いで、来訪者の全身に直接語りかけてくる。思考を介せず、ただその場に立ち尽くし、圧倒的な地球の鼓動を感じてもらうこと。それが、このテーマに込めた想いです。

自身物語となる問い

この咆哮をあげる大地に立ち、あなたは何を叫びたいだろうか。古代の人たちは、この光景をどんな神の姿として語っただろう。この尽きることのないエネルギーは、100年後の未来に、脅威と恵みのどちらをより多くもたらしているだろうか。轟音の中で響く自らの問いは、那須での時間を、単なる思い出ではなく、あなたの心に深く刻まれる物語へと昇華させます。



① 火山の物語

テーマを感じられる 資源・体験

茶臼岳の硫黄の匂いを体感する。噴気の音を聞き火山の生きた鼓動を感じる。荒々しい岩肌に触れて火山の力を感じる。足元の大地が生きていることを意識する。

茶臼岳 トレッキング

噴気孔を間近に望み、硫黄の香りと大地の熱、噴気の轟音を全身で感じられる場所。火山の呼吸を最も強く体感できます。



朝日岳 トレッキング

鋭い岩稜が続く朝日岳への登山道は、火山が作り出したダイナミックで険しい地形を体感させます。山頂からは今も活動を続ける茶臼岳を異なる角度から望むことができ、那須連山全体の雄大なパワーを感じられます。



峰の茶屋、牛ヶ首、姥ヶ平を 巡るトレッキング

荒々しい茶臼岳の姿を眺めながら、火山が育んだ美しい自然景観(湿原や紅葉)との対比を感じることができます。



三斗小屋温泉 の噴泉

登山道を歩いた先で出会う、地面から温泉が噴き出す間欠泉。地球の内部の圧力を直接目にすることができ、火山の奥深いエネルギーを感じさせます。



那須平成の森

火山灰土壌が育んだ「母性」である豊かな森を歩き、生命の力強さと自然の再生を感じる。



八幡のツツジ 群落

火山性土壌と人の営み(放牧)が共創した、「母性」の恵みを感じる景観。



殺生石

山の活動が麓の暮らしにまで及んでいることを示す象徴的な場所。荒々しい火山の表情に触れることができます。



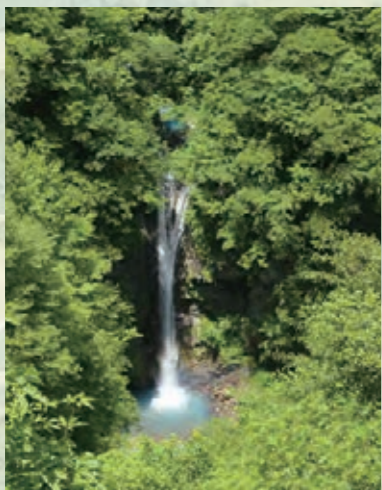
那須高原の牧場・酪農地帯 (那須町・那須塩原市)

火山灰土壌という「母性」の恵みを活かした、那須を象徴する風景。



駒止の滝

火山が作り出した険しい地形美(父性)と、そこを流れる水の恵み(母性)を同時に感じられる場所。





1 火山の物語

那須の火山は、数十万年前から今この瞬間まで
休むことなく、厳しい試練を与える父でもあり、
恵みを育む母としてあり続けている。

父と母なる ストーリー

この大地に立つと、足の裏から遠い記憶が伝わって
くるような感覚に包まれることがあります。それは、この那
須の風景を創り上げてきた、巨大なエネルギーの物語。何
十万年もの昔から、この地の地下深くで燃え続け、今この
瞬間も、静かに、しかし確かに鼓動を続ける火山の物語
です。

その火山は、まるで厳格な父のような顔を持って
います。二度怒れば、空を焦がすほどの噴煙を上げ、
灼熱の流れで大地を覆い尽くし、それまであった
すべての形を無に帰してしまふ。幾度となくこの
那須に試練をもたらしました。殺生石の荒涼とし
た風景や、茶臼岳・朝日岳の険しい山肌は、その父
が刻んだ、逆らうことのできない力の証です。私た
ちに、自然への畏敬の念を静かに、そして厳しく教え
てくれます。

しかし、その父なる火山は、同時にこの上なく慈愛に満
ちた母の顔も持っているのです。父が創った荒々しい大地
を、母は豊かな温泉で潤し、傷ついた生き物を癒してきま
した。火山灰が降り積もった大地は、やがて豊かな土壌
となり、標高ごとに異なる木々を育て、花を咲かせ、動物
たちの命を育むゆりかごとになりました。山麓に広がる酪
農地帯ののどかな風景や、彩り豊かな花畑、そして私た
ちの心と身体を芯から温めてくれる数々の温泉は、す
べて母なる火山の優しさがもたらした、かけがえのな
い恵みなのです。

厳しさと優しさ。破壊と創造。その両極を内
に秘め、絶え間ない活動を続ける火山。その
大きな腕の中で、私たちは生かされていま
す。この父性と母性が織りなす壮大な物
語の上で、あなたは今日、どんな足跡を
刻みますか。

テーマの目的

火山の二面性(破壊と創造、厳しさと優しさ)を理解し、火山活動が那須の地形と生態系、そして人の営みの基盤を作り上げたことを認識する。



物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きたったのは、那須の風景を単なる美しい自然として捉えるのではなく、その背後にある火山のダイナミックな営みを感じてもらうことです。昔ながらの「父」と「母」という比喩を用いることで、火山がもたらす「厳しさと「恵み」という二面性を訪れた方が直感的に、そして深く理解できるようにと考えました。訪れる方自身がこの壮大な物語の中に身を置き、風景と対話し、自らもその物語の一部となる。そんな体験の入り口となることを目指しています。

資源の解説

物語の中に登場する「父が刻んだ力の証」とは、今も火山ガスを噴出する茶臼岳の荒々しい山肌や、草木の生えない殺生石の風景を指しています。これらは、火山の持つ破壊的なエネルギーと、生命を寄せ付けない厳しさを象徴する資源です。例えば、火山の硫黄分を含む厳しい「那須おろし」という風は、高い木の生育を妨げ、笹などの低い植生が広がる独特の景観を生み出しました。それがかつてこの地に13ものスキー場が存在した理由であり、厳しさが人の楽しみという恵みを生んだ。例とも言えるでしょう。一方、「母なる火山の優しさ」は、地下深くから湧き出る温泉や、火山灰の土壌が育んだ那須平成の森の豊かな自然、そしてその恩恵を受けて発展した酪農や農業などの人々の営みを表しています。この対照的な資源を巡ることで、火山の二面性を身体で感じ取ることができます。

感じ取ってほしいメッセージ

火山の持つ圧倒的な力と優しさの共存、地球の営みとしての火山活動、火山が作り出した大地の上に成り立つ生命の営み、自然の厳しさと恵みへの畏敬の念。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後に置かれた「あなた今日、どんな足跡を刻みますか」という問いは、この物語を締めくくるときの問いではありません。むしろ、ここから訪れる方自身の新しい物語を始めていただくためのものです。火山の父性と母性が創り上げたこの舞台の上で、何を感じ、何を考え、どう過ごすのか。その選択の一つひとつが、あなただけの「那須の物語」を紡いでいく。この問いは、訪れた方が受け身の観光客から、物語の「主役」へと変わるきっかけとなることを意図しています。

自身が物語となる問い

父なる山の厳しさと、母なる大地の優しさ。この雄大な風景に、あなたのどのような記憶が重なるでしょうか。そして、この旅で見つけたものを、ひとつ心に仕舞って持ち帰ってみてください。それは那須の自然の厳しさかもしれません。または風の音や、木々の香りのような小さな恵みかもしれません。それらはあなたの明日をどのように温めてくれそうでしょうか。那須の自然に心で問いかけるとき、この地の物語とあなたの人生が交差し、新たな一章が幕を開けるかもしれません。



① 火山の物語

テーマを感じられる 資源・体験

那須岳の荒々しい岩肌と噴気を間近で観察し、今も生きてい
る火山の姿を目に焼き付ける。那須高原の緑豊かな牧草地や森
林を眺め、火山灰土壌が育む豊かさを観察する。植生の垂直分
布を観察しながら歩き、標高によって植物が変わる理由を火山
地形と結びつけて理解する。

一 那須ロープウェイ

火山の「父性」である、荒々しい山肌と
雄大な景色を体感する。



一 殺生石

茶臼岳の山麓にありながら、火山
の「父性」である荒々しい表情と
息吹を間近に感じられる場所。



一 那須温泉

殺生石のすぐそばに湧き出
る「母性」の象徴。厳しさと恵
みが隣り合わせであること
を体感できます。



一 那須平成の森

火山灰土壌が育
んだ「母性」であ
る豊かな森を歩
き、生命の力強さ
と自然の再生を
感じる。



八幡の ツツジ 群落

火山性土壌と人の営
み(放牧)が共創した、
「母性」の恵みを感じ
る景観。



那須高原の牧場・ 酪農地帯 (那須町・那須塩原市)

火山灰土壌という「母性」
の恵みを活かした、那須
を象徴する風景。



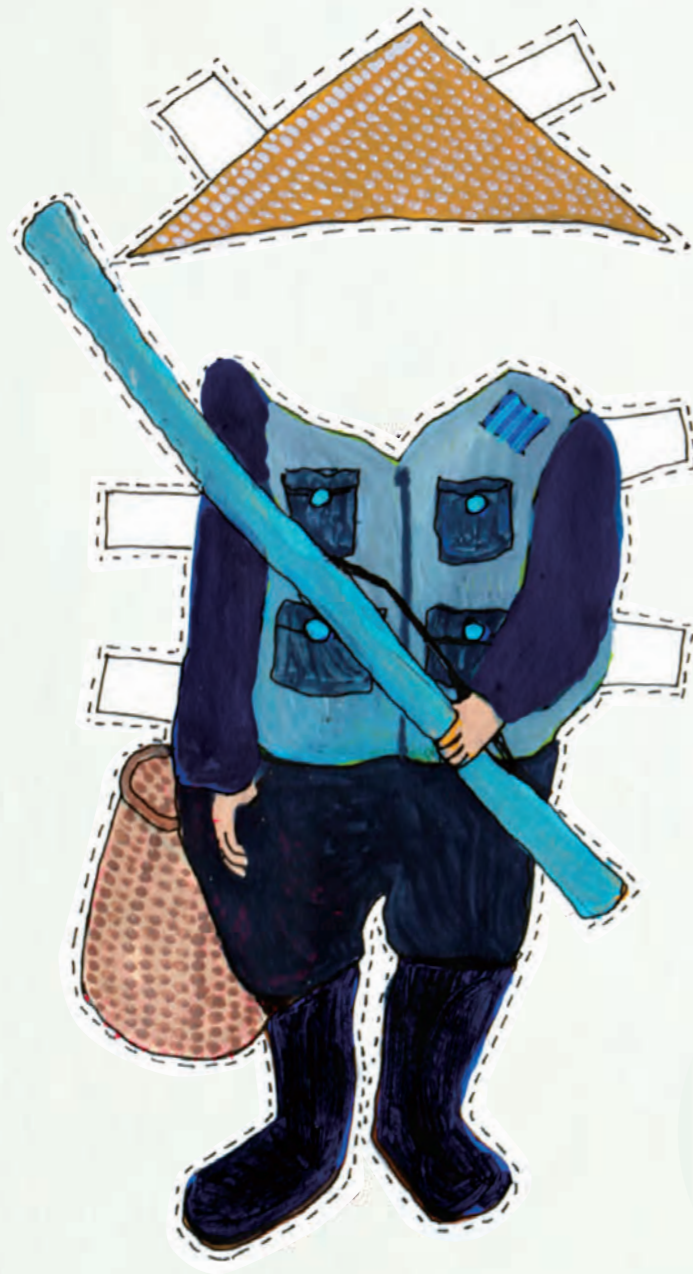
駒止の滝・ 竜化の滝 (那須塩原市)

火山が作り出した険しい地形美
(父性)と、そこを流れる水の恵み
(母性)を同時に感じられる場所。



② 水の物語

自然の圧倒的なポテンシャル



なす爺は釣り好き。
毎年アユ釣りの解禁日が近づくと、
ソワソワして眠れないらしい。「雷と
那珂川のおかげで米や酒もうまい」
が口グセ。那珂川と酒を語らせたら
右に出るものはいないらしい。



那須を大好きになるストーリー集



② 水の物語

那須の山に降った雨は、清らかな
那珂川の源流となり、森を育て、
里を潤し、関東きつての清流として
命をつなぐ。

清流のはじまりの ストーリー

那須の山々に、しつとりと雨が降る音。その一滴が、木の葉を伝い、苔むした岩を滑り、大地に染み込んでいくところを想像してみてください。それは、壮大な旅のはじまりです。地下深くで磨かれ、やがて冷たい湧き水として再び光のもとへ現れた水は、細い流れとなり、仲間と出会いながら、関東きつての清流「那珂川」という大きな命の流れを創り出していきます。

この流れは、まず自らを育んだ山麓の森を豊かに潤します。木々は水を蓄え、たくさんの生き物たちの隠れ家となり、森全体がひとつの巨大なダムのように、ゆつくりと、絶え間なく、下流へと命の水を送り出します。やがて山を抜け、里へとたどり着いた流れは、田畑を潤し、人々の暮らしを支えます。この水が、どれほど多くの命を育み、どれほど遠くまで旅をしていくことでしょうか。那須の山々が、私たちのほるか下流にある暮らしや、150kmの先にある海までをも支えている、大切な「水源地」なのです。

あなたが今、那須の森で耳にする沢の音は、これからたくさんの命と出会う、清らかな旅のはじまりの歌声です。その一滴に、どんな物語の続きを思い描きますか。

テーマの目的

那須の山岳地帯に降る雨が、那珂川という清流の源流となり、森林生態系を育み、人々の暮らしを支え、広域にわたって生命を繋いでいく水の循環と役割を理解する。一滴の雨が山から海へと旅をする過程で、多様な命と暮らしを支えている水の連続性と、那須が持つ「水源地」としての重要性を認識する。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きたかったのは、那須の美しい風景の根幹にある「水」の存在です。そして、その水が、山に降る「滴の雨」から始まり、那珂川という大河となつて多くの命を育む、壮大な「循環の物語」であることです。来訪者が那須の森や沢で感じる清らかさが、単なるその場の心地よさではなく、広大な下流域の暮らしや生態系と繋がっている「水源地」としての価値であることを感じていただくことを目指しました。来訪者自身が、その壮大な旅のはじまりの地に立つ「目撃者」であると感じられれば

資源の解説

物語の中に登場する「那珂川」とその「源流」は、このテーマの核心です。それは、単なる川ではなく、森と里と海をつなぐ「命の帯」の象徴です。また、その水を育む「山麓の森」や、その水によつて営まれる「里の田畑」も、この物語を構成する大切な資源です。駒止の滝のような景勝地は、その水の旅が織りなす美しい「場面」と言えるでしょう。これらの資源は、来訪者が物語の世界と現実の風景とを結びつけるための、大切な道しるべとなります。



感じ取ってほしいメッセージ

山に降った一滴の雨が、やがて大きな川となり、多くの命を育む過程の美しさと神秘性。水が森を育て、田畑を潤し、人々の暮らしを支え、生き物たちの命をつなぐ、かけがえのない存在であること。那須が関東平野を潤す清流の源流域であり、下流域の多くの命と暮らしを支えている「水源地」としての役割と価値。

探求を促す「問い」の解説

「その一滴に、どんな物語の続きを思い描きますか」という問いは、来訪者に内面との対話を促すためのものです。目の前の清流が、この先どこへ流れ、誰を潤し、どんな命を育むのか。その「続き」を想像することで、水の循環（自然）と自分（下流の生活者）との間に、個人的で、実感のこもった特別な関係が生まれます。その感覚こそが、那須での体験を忘れられないものに変える鍵となると考えています。

自身が物語となる問い

この森で一杯の水を飲むとしたら、どんな味がするでしょうか。この水が育んだ恵みを、あなたは誰と分かち合いたいですか。もしこの最初の一滴が言葉を話すなら、あなたに何を語りかけるでしょうか。那須の清流に耳を澄ませるとき、あなたの日常と、この大なる水の旅が、確かに繋がっていくはずですよ。



テーマを感じられる 資源・体験

那須の山々に降る雨を実際に感じ、その雨がどこへ流れていくのかを想像する。那珂川の源流域を訪れ、透明度の高い清らかな水に触れ、その冷たさと清らかさを五感で体感する。森の中を歩きながら、木々が水を蓄え、ゆつくりと川へ送り出している様子を観察する。那須から関東平野へと水が旅をする道のりをたどり、どれだけ多くの地域を潤しているかを知る。地元の農家や住民から、那珂川の水がどのように暮らしたり農業を支えているかの話を聞く。川辺で水生生物を観察し、清流だからこそ生息できる生き物たちの多様性を発見する。水源地としての那須を守る取り組みや、森林保全活動について学び、自分にできることを考える。

一 駒止の滝

那須連山を源とする水が流れ落ちる、壮大な滝。水の力の強さを感じられます。



一 乙女の滝

火山地形と水が織りなす美しい景観。森が水を育んでいることを実感できます。



一 那須平成の森

豊かな森を歩き、水源涵養林としての役割を肌で感じるができます。



一 那珂川での川遊び・釣り・カヌー

関東きつての清流を全身で体感。アユなどの水生生物は、清流の証です。



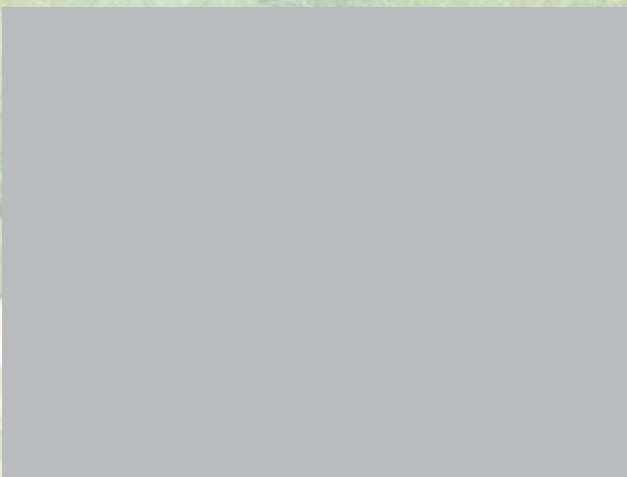
一 黒羽

那珂川中流域。芭蕉も愛した川と里の風景が広がり、水の恵みと共に生きてきた文化に触れます。



一 那須野が原の田園風景

那須連山からの水が、広大な「穀倉地帯」を支えていることを実感できます。





② 水の物語

那須エリアのおいしいお米、
おいしいお酒の秘密は、那珂川の
水が多く自然と、携わって来た人々の
協力の証にある。

めぐり、めぐって、 この一粒のストーリー

目の前にある、つやつやと輝く一粒のお米。グラスに注がれた、芳醇な香りを放つ一滴のお酒。それが、那須の山々を旅してきた水と、多くの自然、そして人々の手が織りなした、長い「協同」の物語ののだとしたら。

すべては、那須連山に降る雨や雪解け水から始まります。その一滴は那珂川の清流となり、広大な大地を潤します。しかし、協同するのは水だけではありません。夏の空を轟かせ、稲を脅かすように見えるあの雷さえも、実は空気中の窒素を土壌に届け、豊かな実りをもたらす仲間なのです。水と、土と、太陽と、そして雷。那須の自然すべてが力を合わせ、一粒の命を育みます。

その恵みを受け取り、次の手へとつなぐのが、人々の営みです。農家は、酪農と連携した循環型の農法で大地を慈しみ、蔵人(杜氏)たちは、清らかな伏流水で米を磨き、その土地の個性を酒に醸します。先人たちから受け継がれた知恵と、ひたむきな努力。自然の力と、人の想いが協同し、ようやく「おいしさ」は形作られます。

そして今、その壮大な協同の旅の物語は、あなたという最後の手渡し相手を待っていました。あなたがその一粒を口に運び、その一滴を味わうとき。水と自然と人々が紡いできた物語は、あなたの身体の中で、どのように響き、どんな温もりとなって心に刻まれていくのでしょうか。



テーマの目的

食卓で米や酒を味わう瞬間を、水を中心とした協同の物語が「形となり、味わわれ、心に刻まれる瞬間」として理解する。訪問者自身が協同の物語の最終的な受け手であり、その物語を完成させる存在であることを感じる。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きたったのは、那須の食材の優位性を解説することではありません。来訪者が「食べる」という行為を通じて、那須の自然と人の営みが織りなす「協同の物語」の、最後の主役になつていただくことです。食材を単なる「モノ」として消費するのではなく、その背景にある水や自然、人々の想いを受け取り、味わうことで、その物語を完成させる。そんな、食べるという行為の持つ豊かさ、那須という土地との深いつながりを感じていただくことを目指しました。と思います。

資源の解説

物語を構成する「協同」の要素は、すべて那須の地に根ざした資源から着想を得ています。物語の中心を貫く「那珂川の水」、そして「おいしいお米」。これらは、人と自然の協同の象徴です。特に、那須の気候がもたらす「雷さえも実り(お米)の美味しさに繋がる」という事実は、自然の力の不思議な協同を物語る、那須ならではの資源です。また、酪農と連携した「循環型農業」の伝統や、清流を活かした「100年以上の歴史がある日本酒造り」は、人が自然と協同するために築いてきた知恵と文化の証しとして、物語に深みを与えています。

感じ取ってほしいメッセージ

自分が協同の物語の一部であること。食べるという行為が物語を完成させること。一滴の水から始まる壮大な協同の旅。協同の物語が自分の心に刻まれること。食べることの意味の深さ。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後、「・・・あなたの身体の中で、どのように響き、どんな温もりとなって心に刻まれていくのでしょうか」という問いは、来訪者に答えを求めものではありません。それは、味わうという瞬間に、意識を集中していただくためのものです。口に広がる味わいの中に、山から来た水の旅路や、雷の力、農家や蔵人の顔を想像してみる。その瞬間、食べるという行為は、那須の壮大な物語とあなた自身とを結びつける、かけがえない体験へと変わっていきます。

自身が物語となる問い

この一杯の水が、どんな旅をしてきたか、想像したことはありませんか。この一粒の米を育てたのは、どんな人たちの笑顔でしょう。あなたが「おいしい」と感じるその瞬間に、何百年と続いてきた那須の自然と人の協同の物語が、確かにあなたへと受け継がれるのです。



② 水の物語

テーマを感じられる 資源・体験

米や酒を味わいながら、その中に込められた協同の物語を感じる体験、食事をしながら、自分が物語の一部であることを実感する体験、二粒の米や一滴の酒の中に、水の旅を発見する体験、食へることを通して、協同の意味を深く理解する体験。

大田原市内 の酒蔵

那珂川の伏流水や那須連山の雪解け水で酒造りを行う蔵元。協同の結晶である日本酒の試飲や見学ができます。



渡邊酒造(旭興)

那須岳麓の 田園風景

「那須連山を背景に広がる「那須ひかり」などの米どころ。水の旅と協同の舞台を一望できます。



農産物直売所

農家の人々が育てたお米や野菜が並びます。作り手という協同の担い手に触れられる場所。



地元の米や酒を 提供する

飲食店・宿泊施設

協同の物語の最終章を、その土地の空気の中で味わう体験。



那須疏水

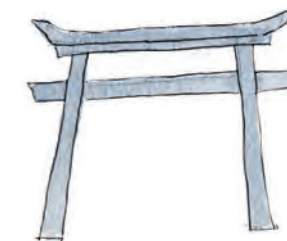
明治の開拓を支えた水路。水と人の協同の歴史を象徴する場所です。



那須エリアの ワイナリーやブルワリー

米や酒だけでなく、火山由来の土壌や良質な水が、ワインやビールといった新たな協同の物語も生み出しています。





暮らしと風土を生み

歴史を紡いできた人のポテンシャル

③ 人の物語



なす爺は信心深い。
山岳信仰が盛んだった土地柄、初詣
はあちこちに出没する。もしかすると
厳しい土壌だったこの地を拓いた
先人たちへの感謝なのかも。
那須の開拓史を語らせたら右に出
るものはいない、らしい。



那須を大好きになるストーリー集



3 人の物語

那須の人々は、自然の脅威と恵みの中で生きるために、源泉を御神体とする山岳信仰を育み、祈りを通じて自然への感謝と畏怖を千年以上次の世代へと手渡してきた。

千年の祈りのストーリー

あなたがいま浸かっているこの温かい湯が、千年以上もの間、人々が手を合わせ、祈りを捧げてきた神聖な場所だとしたら、どんな想いがするでしょうか。

那須の火山は、人々に豊かな温泉という恵みを与えると同時に、ひとたび荒ぶればすべてを奪い去る、畏るべき存在でもありました。人々は、その圧倒的な自然の力をねじ伏せるのではなく、あるがままに受け入れ、共に生きる道を選びました。その知恵こそが、この地に根付いた「信仰」のはじまりです。

彼らは、温泉の源泉そのものを「御神体」として拝みました。それは、自然の厳しき、その脅威の真只中にこそ、生かされていることへの感謝と恵みの本質が宿る、と知っていたからかもしれません。そして、その祈りを一過性のもにせず、確かに次の世代へと「手渡す」ために、人々は「神社」を建て、感謝と畏怖の心を形にしてきました。

この湯は、単なる温かい水ではありません。それは、自然の厳しきの中で、恵みを見出し、感謝を忘れなかつた千年前の人々から、あなたへと続く「祈りのリレー」そのもの。湯けむりの向こうに、途切れることなく続いてきた人々の温泉への想いが見えるようです。あなたは、この温もりの中に、どんな祈りを重ねますか。

テーマの目的

源泉を御神体とする信仰が、単なる過去の習慣ではなく、世代を超えて受け継がれてきた人々の自然観であることを理解する。



物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きだしたのは、温泉という「恵み」の背後にある、火山の「脅威」と、それに向き合ってきた人々の「祈り」です。来訪者が体験する「温泉に浸かる」という行為が、実は千年以上続く「祈りの手渡し」の場に立ち会うことでもある、と感じていただくことを目指しました。単なる観光客としてではなく、那須の自然と人の営みが紡いできた、世代を超える物語の「当事者」として、その温もりを感じてもらえたらと思います。

資源の解説

物語に登場する「源泉（御神体）」は、このテーマの核心です。那須の火山がもたらす噴煙や荒涼とした地形は、古くから人々に畏怖の念を抱かせ、信仰の対象となってきました。那須には主に二つの山岳信仰が息づいています。一つは「高湯山（たかゆきさん）信仰」、もう一つは「白湯山（はくゆきさん）信仰」であり、これらは遠く山形県の「月山（がつさん）信仰」とも繋がりをしています。特に高湯山信仰の「御宝前」のように、火山の息吹を最も強く感じる場所を聖地とした事実も、自然の厳しき（畏怖）と恵み（感謝）が不可分であるという、この土地の自然観を象徴しています。かつて、地図上で那須より北は「黄泉（よみ）の世界」と認識される時代がありました。茶臼岳から立ち上る噴煙が視界を遮り、その向こう側を「黄泉の国」と想像させたのかもしれませんが。この神秘性こそが、信仰の揺るぎない土台となっています。「那須温泉神社」は、そうした目に見えない祈りや自然観を「形」にし、コミュニティの拠り所として、千年という時間を超えて「手渡す」ために不可欠な場所であり続けています。

感じ取ってほしいメッセージ

自然の恵みに対する深い感謝の心。自然への感謝と畏怖が同時に存在することの意味。世代を超えて受け継がれる想いの尊さ。人と自然が共生してきた歴史の重み。現代にも続く自然への敬意。

探求を促す「問い」の解説

「あなたはこの温もりの中に、どんな祈りを重ねますか」という問いは、来訪者に内面との対話を促すためのものです。千年前の人々が捧げた祈り。それは、現代に生きる私たち自身の「健やかに生きたい」「大切な人を守りたい」という根源的な願いと、どこかで繋がっているはずです。この湯を介して、過去と現在が交差し、あなた自身の自然への想いを見つめ直すきっかけを提供したいと考えました。

自身が物語となる問い

もし、あなたが千年前、源泉の前に一人で立ったとしたら、どんな感情が湧き上がるでしょう。そして、何を祈るでしょう。あなたが今、当たり前のように受け取っているこの恵み。それを未来へ手渡すために、私たちにできることは何でしょう。湯けむりに包まれ、静かに想いを巡らすひとときが、きっとあなたの特別な物語となって心に残るでしょう。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

温泉に浸かりながら、この湯を神聖なものとして大切にしてきた人々の想いに触れる。源泉や那須温泉神社を訪れ、自然への感謝を形にできた文化を体感する。地域の人々が今も大切にしている自然との関わり方を知る。自分自身の自然観を見つめ直すきっかけを得る。

那須 温泉神社

鹿の湯と共に歴史を刻む、山岳信仰の中心地。手渡されてきた祈りの形に触れます。



板室温泉 神社

(那須塩原市)

白湯山信仰の中心地。那須岳の別の側面に対する信仰の形に触れます。



ネットから

三斗小屋 温泉

歩いてしか行けない秘湯。山岳信仰と共に歩んできた湯治場の歴史を感じさせます。



雲巖寺

(黒羽・大田原市)

山々に抱かれた禅寺。修験道とも縁が深く、山に対する人々の敬虔な祈りの空気を感じられます。



鹿の湯

1400年近い歴史を持つ温泉。その源泉地帯は、まさに信仰の対象であった場所の面影を残します。





③ 人の物語

那須の街道は千年以上も前から旅人たちが出会い、互いの物語が交差し、この地に文化を編み続けてきた交流の舞台である。

物語が交差する 道のストーリー

あなたが今立っているこの道が、千年以上も前から、数え切れないほどの旅人たちが行き交った道だと想像してみてください。

なぜ、これほど多くの人々が、この地を目指し、あるいは、この地を通り過ぎていったのでしょうか。

それは、地図を広げてみればすぐにわかります。この那須は、広大な関東平野が終わりを告げ、みちのく（東北地方）へと続く山々が始まる場所。つまり、日本の中心部と北国とを結ぶ道が、ぎゅっと二つに集まる「結び目」だったのです。都から北を目指すにも、北から都へ向かうにも、誰もが必ず通らなければならない「関門」と呼ばれる理由です。

だからこそ、那須の街道は、ただ目的地へと向かうためだけの「道」ではありませんでした。人、モノ、情報、文化…そのすべてが、この地で出会い、互いの物語が交差する「舞台」となったのです。

遠い都から運ばれてきた政治や文化、北の地で育まれた知恵や産物、そして旅人同士が宿場町や茶屋で交わした何気ない世間話。それらすべてがこの「道」を通じて運ばれ、この地で出会い、混ざり合い、ゆつくりと時間をかけて「那須の文化」という一枚の美しい織物へと編み上げられてきました。

あなたは今日、この歴史の交差点でどんな物語に出会い、そして、あなた自身のどんな物語をこの地に残していくのでしょうか。一歩踏み出すあなたの足跡もまた、千年続く物語の、新たな「ページ」となるのです。

テーマの目的

街道での出会いが単なる通過ではなく、文化創造の源泉であったことを理解してもらい、人と人との交流が地域文化を育ててきたことを実感する。また、その背景として、那須が関東と東北を結ぶ地理的に重要な「かなめとなる場所」であった歴史的重要性を知る。



物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きかけたのは、那須の「街道」を、単なる交通路としてではなく、文化が生まれ、編まれてきた「交流の舞台」として捉え直すことです。「なぜ」那須がそれほどまでに重要な交流の舞台となり得たのか。それは、この地が関東平野の終端という地理的な理由から、人やモノの流れが集中する「結び目（かなめ）となる場所」であったからです。来訪者が街道の跡を歩くとき、そこで交わされたであろう無数の人々の出会いや物語に思いを馳せてもらうことを目指しました。

資源の解説

那須エリアが関東と東北地方を結ぶ交流点であった歴史は古く、縄文時代にまで遡ります。古代には、奈良時代の大宝律令によって「東山道」が整備され、遠い都（奈良）と東北地方を結ぶ礎となりました。源義経の逃避行や、西行法師の歌枕の旅など、多くの歴史的な旅がこの地を舞台とし、那須の与一の伝説や地域の民俗芸能にも深い影響を与えてきました。江戸時代に入ると、これらの道はさらに重要な役割を担います。エリアの東部を通る「奥州街道」は五街道の一つとして整備され、那須エリア内にも大田原、咲山、鍋掛、腰堀、芦野といった宿場町が置かれ、多くの人や物資が行き交いました。また、エリアの西部には、会津と江戸を結ぶ重要な交通路であった「会津西街道（下野街道）」が通り、関谷（那須塩原市）などの宿場が賑わいを見せました。この会津西街道が、1683年の日光大地震で出現した五十里湖（かりこ）によって長期間不通となった際、会津藩の年貢米を江戸へ運ぶ代替路として急遽整備されたのが「会津中街道」です。この道は那須エリアの板室や三斗小屋を通り、大峠を越えて会津へと抜ける険しい道筋でしたが、那須が会津と江戸を結ぶ重要な結節点であったことを示す、もつとの物語です。特に松尾芭蕉は「おくのほそ道」の旅で那須エリアと深く関わり、黒羽で13日間、那須町で4日間滞在しました。「遊行柳」で千年前の西行の物語に心を重ね、殺生石を訪れるなど、街道が時間を超えて物語を交差させる舞台であることを象徴的に示しています。芦野や伊王野（奥州街道）、関谷（会津西街道）に残る宿場町の面影は、かつての交流の賑わいを想像させ、物語への没入感を深めてくれます。

感じ取ってほしいメッセージ

出会いの持つ創造的な力。物語や知識の交換がもたらす豊かさ。地域文化が外部との交流によって育まれてきたこと。那須が日本の大動脈として果たしてきた役割。一人ひとりが文化の担い手であること。

探求を促す「問い」の解説

「あなたは今日、この街道でどんな物語に出会い、そして、あなた自身のどんな物語をこの地に残していくのでしょうか」という問いは、来訪者を「受け身の観光客」から、文化を編む「現代の旅人」へと変えるためのものです。この地を訪れ、何かを感じ、誰かと話すこと。その一つひとつが、千年続く那須の物語に新たな糸を加え、未来へと文化を編み続ける行為そのものであると気づく。それが、この問いに込めた想いです。

自身が物語となる問い

もし、あなたが江戸時代の旅人としてこの宿場町に着いたら、茶屋で隣り合った人に、どんな故郷の話をしますか。あなたがこの旅で出会った小さな発見や感動は、千年後の未来に、どんな物語として伝わっているのでしょうか。この道を歩くとき、すれ違う風の音に、かつての旅人たちのどんな声がかえってくるのでしょうか。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

宿場町や茶屋での人々の交流の様子を想像する、異なる地域からの情報や文化が混ざり合う場面を思い描く、現代の自分も文化の担い手の一人であることを自覚する、地域の文化的特徴が交流から生まれたことを発見する。

芦野・伊王野の 古い町並み散策

かつての宿場町の面影が残るエリア。往時の旅人たちの交流を想像しながら歩くことができます。



奥州街道 (東山道) の旧街道

白河の関へと続く道筋。義経や芭蕉も歩いたとされる道を通り、歴史の交差を体感できます。



白河の関 (福島県白河市)

那須エリアとみちのくの境界。多くの旅人にとって物語の転換点となった場所の空気を感じられます。



遊行柳 (那須町)

松尾芭蕉が訪れ、千年前の歌人の物語に想いを馳せた場所。物語が交差する舞台を象徴する場所です。



地域の 茶屋やカフェ

現代の「宿場町」。旅人(来訪者)と地域の人が出会い、新たな物語が交差する場所です。



那須 歴史 探訪館

街道の歴史や、この地で交差した文化の軌跡を知ることができます。





テーマを感じられる 資源・体験

〇〇〇なる時代の史実や伝承に触れながら、それらが那須という土地の力によって生まれ、人々の手によって遠くまで運ばれていった軌跡を見ずる体験。伝承や伝説を通じて過去の人々の想いを感じる。自分も物語を紡ぐ一員であると感じる体験。

旧奥州街道

街道沿いに残る宿場町の面影、道祖神、馬頭観音。



ネットから

那須 温泉 神社

温泉の神様を祀り、多くの人々の信仰を集めてきた歴史。



義経岩

源義経が奥州へ向かう途中に立ち寄ったとされる伝説の地。



ネットから

遊行柳 (那須町)

西行法師や松尾芭蕉も歌に詠んだ、道のほとりに佇む柳。



殺生石

玉藻の前伝説と松尾芭蕉の足跡が重なる、火山の息吹を感じる場所。



那須 歴史 探訪館

街道の歴史や、この地で交差した文化の軌跡を知ることができます。



黒羽

松尾芭蕉が長く逗留した「おくのほそ道」の重要な地点。





3 人の物語

那須の自然の彩りは、人々が土地の声を聞き、馬とともに歩み、自然のリズムに寄り添って暮らしを重ねてきた対話の軌跡である。

風景に刻まれた

ストーリー

那須の森を歩くと、木々の間を抜ける光が、まるで古い記憶の断片のように足元に落ちてきます。春に燃えるような赤色で山肌を染め上げるツツジの群れ。それらは、ただそこにある自然ではなく、遠い昔から続く、人と自然との静かな「対話」が描いた軌跡なのかもしれません。

火山という厳しい大地を受け入れた人々は、自然を力で支配するのではなく、その声に耳を澄まし、共に生きる道を選びました。彼らは森に入り、暮らしの薪を得るために木を切りました。しかし、それは一方的な取奪ではありません。森が再生するリズムを知り、切った場所がやがて若返るように、次の世代のために森を手入れする。それは、森と交わした「命の約束」のようなものでした。

この地ではかつて、馬たちも大切な家族であり、働き手でした。山に放たれた馬は、自由に草を食みます。けれど、ある特定の植物だけは、その毒を知ってか、不思議と口にすることはありませんでした。それが、ツツジでした。馬たちが他の草を食み、大地を整える一方で、ツツジだけが残り、年々その花を咲き誇らせていく。

いま目の前にある息をのむようなツツジの彩りや、若々しい森の緑は、人が設計した庭園とは違います。それは、人が自然のリズムに寄り添い、馬と共に歩んだ、何世代にもわたる暮らしの営みが、思いがけず風景に刻み込んだ「対話の証」なのです。この美しい風景は、私たちに何を語りかけているのでしょうか。

テーマの目的

那須の風景が人々と自然との長い対話の結果であることを伝える。一方的な自然の利用でも、自然への単なる服従でもなく、自然の声を聞きながら暮らし方を模索してきた人々の姿勢を理解する。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

那須の代表的な風景である「ツツジ」や「森」が実は人の営みと深く結びついていることを描きたいと考えました。それは、自然を征服するのではなく、あるいは手つかずのまま保護するのではなく、自然のサイクルに人が寄り添い、関わり続けることで生まれてきた「第三の風景」とも言えるものです。この物語は、その美しい関係性に光を当てて、ことを目指しました。

資源の解説

「八幡のツツジ」の群生は、このテーマを象徴する風景です。かつてこの地は火山性土壌で田畑に向きだつたため、軍馬や農耕馬としての「那須駒」の生産が盛んに行われました。山に放牧された馬たちが、毒のあるツツジを避けて他の草を食んだことで、見事なツツジの群落が奇跡的に育まれたと言われています。人の営みと自然の特性が織りなす、意図せざる創造です。また、里山に広がるかつての「薪炭林」は、当時の人々が森のリズムに合わせて木を利用し、森を常に若々しく保つてきた「対話の軌跡」そのものです。那須には貴重なブナの原生林も残されています。かつて、関東最大のスキー場計画がありましたが、那須の貴重な「ブナの原生林」を保護するために中止されました。これは、地域の自然環境を重視する姿勢を示す象徴的な出来事でもあります。これもまた、人々が自然との対話を選んだ、那須の姿勢を示す大切な物語なのです。

感じ取ってほしいメッセージ

自然と対話しながら暮らしを築くことの大切さ。持続可能な資源利用の知恵。自然のリズムに寄り添うことで生まれる調和。そして、その対話が美しい風景として結実していることへの感動。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「この美しい風景は、私たちに何を語りかけているのでしょうか。」という問いは、あなたを単なる風景の鑑賞者から、その風景を持つ物語の読み解き手へと誘うものです。風景を「答え」としてではなく、過去からの「問いかけ」として受け取ってほしい。そして、その問いかけの奥にある、人と自然の持続可能な関係性について、想いを馳せるきっかけとなることを願っています。

自身が物語となる問い

先人たちは、馬や森と対話し、この彩り豊かな風景を私たちに残してくれました。では、今を生きる私たちは、何と対話し、どんな風景を未来に手渡すことができるのでしょうか。あなたがこの地で感じる風土の香り、木々のささやき。それらすべてが、あなたに語りかける「土地の声」かもしれません。あなたはこの地で、どんな新しい対話を始めますか。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

薪炭林の若い木々を見ながら、計画的な伐採と再生のサイクルを理解する。草原の管理が、放牧という人の営みによって維持されてきたことを知る。ツツジの群生が、馬との共生の中で生まれた景観であることを発見する。現代の持続可能性の課題と、先人の知恵との共通点を見出す。

八幡の ツツジ 群落

那須駒の放牧が育んだ、人と馬と自然の対話の軌跡。



那須 平成の森

人の手が入った森(薪炭林)と、これからの森の姿を学ぶフィールド。



那須高原 ビジター センター

那須の自然の成り立ちと、人の営みの歴史を知る。



那須 歴史探訪館

那須駒の歴史や、昔の人々の暮らしの道具に触れる。

芦野・伊王野の 里山風景

薪炭林や田畑など、人と自然が共生してきた景観。





3 人の物語

那須の風土を形づくったものは
2つの開拓であり、開拓者たちの
汗と涙、喜びと絆が、西洋的な雰囲気と
他者を受け入れるオープンマインド
として、脈々と受け継がれている

2つの開拓の

ストーリー

那須の高原を歩くと、どこか異国の風を感じることはありません。広々とした牧場の風景、ハイカラな建物のたたずまい。そして、初めて訪れたはずなのに、ふわりと受け入れられるような、不思議な開放感。この土地の空気は、いったいどこから来たのでしょうか。

その答えは、かつて不毛の地と呼ばれたこの火山の大地に、異なる時代を生きた人々が刻んだ、二つの力強い足跡にあります。

すべては明治の時代、遠い西洋の文化に夢を馳せた華族たちが、この荒涼の原野に立つたことから始まりました。彼らが目指したのは、日本でまだ誰も見たことのない、西洋式の広大な農場。火山灰の不毛の地に鉄を入れることは、想像を絶する苦難(汗と涙)の連続であったはずですが、しかし、彼らの情熱は決して尽きることなく、ついにこの土地に「西洋的な雰囲気」という初めての彩りを灯したのです。

そして、時を経た戦後の荒野に、再び人々が立ちました。満州や南房など、遠い地から生きる場所を求めて帰還した人々です。彼らには、失うものは何もありませんでした。ただ、生きるために、凍てつく火山灰の大地と真正面から向き合いました。当初目指した畑作は困難を極めました。彼らは諦めず、互いの小さな肩を寄せ合い、やがて酪農へと活路を見出します。異なる背景を持つ人々が、生き抜くという一点で支え合ったその経験こそが、この土地に「他者を受け入れる温かさ・オープンマインド」という、かけがえのない土壌を育んだのです。

今、私たちが感じるこの心地よい風は、この二つの開拓の物語が溶け合ったもの。困難の中で流された汗と涙、そしてそれらを乗り越えた喜びと絆が、那須の「風土」として息づいています。あなたが今、ここで深く息を吸い込むとき、その風はどんな物語を運んできますか。

テーマの目的

明治期の華族による西洋式農場開拓と戦後の満州引揚者による開拓という2つの異なる開拓の歴史が、ハイカラ文化とオープンマインドという那須の特徴を形成したのかを理解する。開拓という行為が単なる土地開発ではなく、人と人との絆を紡ぎ、新しい文化と精神を生み出す営みであったことを感じる。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

那須を訪れる多くの人が感じる「西洋的な雰囲気」と、移住者や旅行者を温かく迎える「オープンマインド」。この二つが、実は偶然生まれたものではなく、明治と戦後という二つの決定的な「開拓」の歴史によって育まれたということを、二つの物語として感じてほしくて、このストーリーは生まれました。風景の美しさだけでなく、その奥にある人々の「汗と涙、喜びと絆」の記憶に触れていただけたらと願っています。

資源の解説

明治の「西洋式農場開拓」の面影は、今も続く広大な牧場風景や、旧青木家那須別邸(日本遺産)明治貴族が描いた未来の「那須」の構成文化財などに色濃く感じることが出来ます。それらは、当時の人々が見た「ハイカラ」な夢の証です。一方、戦後の開拓は、満州や南房など多様な地域からの引揚者が中心となりました。火山灰土壌の荒れ地は畑作に向きで、多くの苦難の末に酪農へと転換していった歴史があります。その苦難の歴史は「那須開拓殉難者慰霊碑」に静かに刻まれており、彼らの営みが現在の那須の酪農の礎となっています。

感じ取ってほしいメッセージ

困難な環境に立ち向かった開拓者たちの勇気と希望。異なる背景を持つ人々が互いに助け合い受け入れ合った寛容さ。その精神が今も那須に息づいていること。自分もその歴史の延長線上に、いるという連続性。那須が持つ温かな受容の文化の根源。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「その風はどんな物語を運んできますか。」という問いは、あなたが今感じている那須の「空気」を、単なる現象としてではなく、過去から吹く「風」として受け止めていただくためのものです。ハイカラな雰囲気も、人の温かさも、すべては先人たちの営みの続き。あなたはその風の中に、自分自身の物語の「主役」として立っているのです。

自身が物語となる問い

荒野は、二つの開拓を経て、人々を受け入れる豊かな大地となりました。もし、この土地の持つ「寛容さ」や「開拓者精神」が、あなたに新しい一歩を踏み出す勇気をくれるとしたら。あなたは「受け入れる」大地で、どんな新しい種を蒔き、どんな花を咲かせたいと思いますか。



テーマを感じられる 資源・体験

那須の牧場や農場を訪れ、開拓の歴史に思いを馳せる。地元の人々との交流を通じて、受け入れられる温かさを実感する。西洋的な建築物や文化と、日本の伝統が融合した風景を体験する。開拓記念館や資料を通じて、2つの開拓の物語を知る。那須の食材を味わいながら、開拓者たちの努力の結晶を感じる。

一千本松牧場

明治の西洋式農場の夢を受け継ぐ、広大な牧場風景に触れる。



一南ヶ丘牧場

牧場の風景の中で、開拓者たちが見た夢の続きを体感する。



那須 歴史 探訪館

明治と戦後、二つの開拓の苦難と希望の物語を知る。



那須開拓殉難者 慰霊碑

荒野を豊かな大地に変えた先人たちの汗と涙に思いを馳せる。の物語を知る。



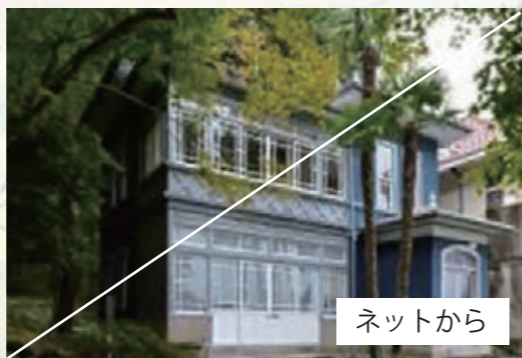
那須高原の 広大な 牧場風景

車窓に広がる風景から、ハイカラな開拓の歴史を感じよう。



歴史ある 別荘地の 建築

明治の開拓がもたらした西洋的な雰囲気と、日本の自然が融合した独特の景観を体感する。



ネットから

牧場の 酪農製品 (チーズ、牛乳)

荒野を牧場に変えた人々の情熱が詰まった「本物の味」に触れる。



旧青木家 那須別邸

明治の開拓精神と、西洋の文化が融合した「ハイカラ」な建築と物語に触れる。



道の駅 那須高原 友愛の森

地元の農産物直売所で、開拓者たちの努力の結晶(酪農製品や野菜)を味わう。





3 人の物語

「食材の宝庫」と呼ばれる
那須の豊かさは、この土地を愛する
職人たちが自然と対話しながら、
こだわりと想いを込めて育て
上げてきた想いの結晶である。

一皿に込められた ストーリー

那須で出会う一皿には、不思議な透明感があります。グラスに注がれた二杯の牛乳、朝露に濡れたばかりの野菜、艶やかに輝く一粒の米。その「おいしい」という感覚が単なる味覚を超えて、心の深いところまで染み通ってくるようです。

この土地は、確かに火山と水という豊かな自然に恵まれています。しかし、私たちが感じるこの滋味深さは、それだけから生まれるものではありません。

ここには、自然の機嫌をうかがい、その声に耳を澄ます「職人たち」がいます。彼らは、火山灰が混じる気難しい大地と対話し、その日の風の色を読み、水の一滴にさえ感謝を込めます。ある人は、牛一頭一頭の小さな癩まで見抜き、家族のように寄り添います。またある人は、理想の一粒の米のために、気の遠くなるような試行錯誤を、何年も、時には何世代も続けています。

それは、彼らの「こだわり」であり、譲れない「想い」そのものです。

那須が「食材の宝庫」と呼ばれるのは、たくさんの種類の食べ物が採れるから、というだけではありません。一つひとつの食材が、この土地を愛する人々の、静かな情熱と努力、そして数えきれないほどの対話を経て生み出された「想いの結晶」だからです。あなたが今、その結晶を口に運ぶとき。その一皿の向こうに、どれほど多くの手のひらと、誠実な眼差しがあるかを感じてみてください。あなたは、その瞬間、どんな物語を味わうことになるのでしょうか。

テーマの目的

那須が「食材の宝庫」と呼ばれる理由が、単なる自然環境の良さだけでなく、携わる人たち一人ひとりが自然と向き合い、試行錯誤を重ねながら育て上げた努力と想いの積み重ねであることを理解する。「宝庫」という言葉の背後にある、無数の生産者の物語と想いを感じる。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

「食材の宝庫」という言葉は、ともすれば「何でも揃う便利な場所」という表層的なイメージを与えてしまいかもしれません。この物語で描きだかったのは、その言葉の奥深くにある、無数の「人」の存在です。那須の「宝」とは、食材という「モノ」ではなく、それを作り出す人々の「想いの結晶」であること。食べるという行為を通じて、その物語に触れていただくことを目指しました。

資源の解説

那須の風土は、酪農や高原野菜、米作りなど、多様な食を生み出しています。しかし、火山灰を含む大地や冷涼な気候は、決して常に優しいわけではありませんでした。戦後、作物が育たない火山灰の荒野に立ち、絶望の中で活路を見出した牛乳。それは、この厳しい大地と対話し、家族のように牛を育てた人々の、希望の味そのものです。日本有数の企業がこの地を選んで育て始めた、真っ赤なトマト。冷涼な気候と清らかな水が、開拓者たちの情熱と出会い、凝縮された甘みを生み出しています。そして、遠くロシアから来た人々との交流の中で生まれた、一個のピロシキ。厳しい開拓の冬を共に越え、心を温め合った交流の記憶が、今もその味に息づいています。その自然と「対話し」、時には開拓の苦勞を乗り越え、試行錯誤を重ねてきた「職人たち（生産者）」の技術と哲学こそが、那須の食材を特別なものにしていきます。彼らの農場や工房、そして直売所は、その「想いの結晶」に直接触れられる場所です。

感じ取ってほしいメッセージ

「宝庫」を形成する一人ひとりの生産者の顔と想い。自然と人間の協働によって生まれる豊かさ。食べることを通じた生産者との心の交流。一つひとつの食材に込められた物語の深さと温かさ。「宝」と呼ばれるに値する価値の重み。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「あなたは、どんな物語を味わうことになるのでしょうか。」という問いは、あなたを「消費者」から「物語の体験者」へと誘うためのものです。「食べる」という行為は、生産者が紡いできた物語の、最後のページをめくる行為でもあります。その一皿に込められた時間と想いを感じることで、あなたの旅は、より深く、滋味豊かなものになるはずです。

自身が物語となる問い

この土地の職人たちは、自然と対話し、日々「想いの結晶」を生み出しています。もしあなたが、目の前の一皿に込められた想いを受け取ったなら。あなたは、その生産者に、どんな「ありがとう」を伝えたいのでしょうか。そして、あなた自身は、この食の体験からどんな物語を持ち帰りますか。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

食材を口にする際に生産者の顔や想いを思い浮かべる体験、生産現場を訪れて生産者と直接対話する体験、「食材の宝庫」という言葉の背後にある無数の物語を発見する体験、食べるのが単なる消費ではなく生産者との関係性を築く行為であると感ずる体験。

地元の生産者が持ち寄る「想いの結晶」である野菜や加工品に触れ、その多様性を知る。



道の駅 那須高原 友愛の森

農産物直売所

(道の駅 東山道伊王野など)

地元の人々の日常に並ぶ、採れたての食材から生産者の顔を想像する。



チーズ 工房

職人たちのこだわりと、那須の風土が生み出すチーズの物語を味わう。



地元の 酒蔵

那須連山からの伏流水と、米農家、杜氏の協働が生み出す日本酒の物語を知る。



地元の食材を使う レストラン・カフェ

シェフという職人が、生産者の想いを受け継ぎ、一皿の物語として表現する場を体験する。



ファーマーズ マーケット

(那須地域のマルシェ)

生産者(職人)と直接対話し、食材に込められた想いを直接聞く。



ネットから



3 人の物語

山頂から山麓まで那須の自然が語りかける声に耳を傾け、それを言葉や形にして伝えようとする人々の情熱が、あなたの心に響く体験を生み出している。

心に届ける

体験のストーリー

森を歩いていると、一枚の葉の形に、あるいは沢の音の響きに、ふと心が動かされることがあります。それは美しい、あるいは、不思議だ、と感じる純粋な感動です。しかし、その感動の奥に、さらに深い物語が隠されているとしたらどうでしょう。

この地には、その「自然が語りかける声」に、生涯をかけて耳を傾けている人々があります。彼らは、山頂の荒々しい岩肌が刻んできた時間の記憶を読み、山麓のブナの森がどのような命を育んでいるかを知り、そのすべてを、訪れる誰かの心に届けたいと願っています。

ある人は、自然を案内する「ガイド」として、あなたが見過してしまうかもしれない小さな命の輝きを指し示し、その意味を解きほぐします。彼らは皆、言葉や形は違えども、自然という偉大な存在の「翻訳者」なのです。

彼らがしていることは、単なる知識の伝達ではありません。それは、自らが深く愛するものの物語を、どうすればあなたの心に響かせることができるかという、情熱をかけた挑戦です。彼らの熱のこもった眼差しや言葉に触れるとき、風景はただの景色ではなく、あなたと深く結びついた「体験」に変わります。

その熱意を受け取ったあなたの心には、どんな新しい物語が生まれ、どんな言葉が響き始めるのでしょうか。

テーマの目的

那須でガイド、自然体験に携わる人々が、自然からのメッセージを受け取り、それを来訪者に伝えようとする情熱と努力を理解する。「伝える」という行為の価値と、そこに込められた想いを感じる。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

那須での感動的な自然体験が、実は「自然と「あなた」という一対一の関係だけで完結しているのではなく、その間に立つ「伝え手」の情熱によって、より深く、響くものになっていることを描きたいと思いました。体験の価値は、人が人を想う「情熱」によってこそ生み出される、ということがこの物語の核心です。

資源の解説

那須の「資源」は、山や森、川だけではありません。その魅力を解き明かそうとする「人」こそが、最も貴重な資源です。「人ひとり」が持つ自然の深い洞察と、それを伝えようとする「想い」そのものが、このテーマの資源です。

感じ取ってほしいメッセージ

自然の声を聴こうとする人々の感性。伝えることへの情熱と責任感。表現の多様性。伝え手と受け手の心の交流。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「どんな言葉が響き始めるのでしょうか。」という問いは、あなたが「受け手」であると同時に、新しい「伝え手」になる可能性を秘めていることを示唆しています。ガイドの情熱があなたの心に火を灯したなら、あなたはもう物語の傍観者ではありません。あなた自身、その感動を誰かに語り始める「主役」となるのです。

自身が物語となる問い

森の翻訳者たちは、あなたにそつと物語のバトンを渡しました。あなたがこの地で出会った、心から「美しい」と感じた瞬間は、どんな物語でしたか。そして、その物語を、あなたは次に、どんな言葉で、誰に伝えたいのでしょうか。



テーマを感じられる 資源・体験

ガイドの解説を通じて、自然の新たな側面を発見する。作家やアーティストが自然をどのように解釈し表現しているかを知る。地域の人々が「なぜこれを伝えたいのか」という想いに触れる。自分自身も誰かに那須の魅力を伝えたいくなる。

那須 平成の森 (那須町)

インタープリター(森の案内人)の情熱に触れながら、自然の声を聴く森を歩く。



那須高原 ビジター センター (那須町)

那須の自然の成り立ちや仕組みを、伝えるために工夫された展示や解説から知る。



各種ネイチャー ガイドツアー

ガイド一人ひとりの個性的な視点や「伝えたい」という想いそのものを体験する。





③ 人の物語

那須という場所は、自然との調和を
求める人々を惹きつけ続け、
彼らが創り出す心豊かな時間と
空間が、この土地の新しい物語を
紡いでいる。

惹きつけあう

人々のストーリー

那須の森を歩き、カフェのテラスでふと息を
つくとき。この場所に流れる時間の質感が、ほか
のどことも違うと感じるかもしれません。それ
は、ただ美しい自然がそこにあるから、というだ
けではない、不思議な力に満ちているからです。

この土地には、まるで「磁力」のように、ある特
定の人々を惹きつけてやまない何かがあるよう
です。それは、「自然と調和しながら生きたい」と
心から願う人々を、時代を超えて呼び寄せる静
かな力。

遠い昔の開拓者たちもそうであったよう
に、今も、インスピレーションを求めるアー
ティストや、土に触れることを選んだ職人、
自分らしい時間を大切にしているカフェの店主た
ちが、この地に集まってきました。彼らは、那須
の風土に敬意を払いながら、自らの夢や価値
観を重ね合わせ、新しい文化の種を蒔いてい
ます。歴史ある別荘地の静けさと、新しく生ま
れた小さな店の活気が、まるで昔からそうであっ
たかのように自然に溶け合っている風景。

それこそが、彼らが創り出す「心豊かな時間と
空間」であり、那須の物語が、過去の記憶としてだ
けではなく、今この瞬間も、豊かに紡がれ続けてい
る確かな証なのです。

この磁力に導かれて、今、ここにいるあなた。あな
たはこの風の中で何を感じ、この土地の物語にどん
な新しい音色を加えることになるのでしょうか。

テーマの目的

那須が持つ磁力(人々を惹きつける
力)と、そこに集まる人々が新しい文
化や価値を創造していることを伝える。
訪れる人々が、那須の進化し続
ける物語の一部になれることを実感
する。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

那須の魅力は、雄大な自然や歴史的な遺産といった「完成されたもの」
だけにあるわけではありません。この物語で描きたかったのは、那須が持つ
「磁力」に引かれた人々が、今この瞬間も新しい魅力を生み出し続けている
という「現在進行形の物語」です。那須は、訪れる人々を傍観者にせ
ず、その物語の「書き手」の一人として迎え入れてくれる場所であること
を感じていただけたらと願っています。

資源の解説

このテーマの資源は、那須の「人」とその「営み」そのものです。例えば、こ
の地で医師として人々と触れ合い、那須湯本の日常や風土に根ざした暮
らしの姿を、ユーモアと温かい眼差しで描き続けた作家の見川鯛山氏。
彼の作品は、まさに那須の「心豊かな時間」を映し出しています。また、
那須八幡に生まれ、この土地の自然や動物、子どもたちを題材に、鳥山
和紙や益子焼といった地域の素材を用いて、那須独自の温かみある郷土
民芸の世界を「創り出し」た作家の五十嵐豊氏。彼らのように、那須の
風土を愛し、それぞれの方法で表現した人々。そして、新しく移住して開
かれた個人的なカフェやベーカリー、自然に寄り添う作品を生み出す
アーティストの工房、多様な人々が集うマルシェ。それら二つひとつが、那
須の「心豊かな時間と空間」を創り出し、この土地の物語を新しく紡い
でいる、かけがえのない資源です。

感じ取ってほしいメッセージ

那須が持つ、人々を惹きつける独特の魅力。自然との調和を
求める人々の価値観と生き方。過去から続く物語と、今も新し
く紡がれている物語の共存。自分も那須の物語の一部になれると
いう可能性。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「あなたは、この土地の物語にどんな新しい音色
を加えることになるのでしょうか。」という問いは、あなたもまた、
この磁力に惹かれて那須を訪れた「主役」の一人である、というこ
とをお伝えするためのものです。あなたがここで過ごす時間、感
じる心地よさ、それらすべてが、那須の物語の新しい「ページ」と
して確かに刻まれていく、ということを想像してほしいのです。

自身が物語となる問い

この土地に集う人々は、自然との調和の中に「心豊かな時間」
を見出ししてきました。では、あなたにとっての「心豊かな時間」
は、どのようなものでしょうか。そして、あなたがこの那須で過ご
すひとときが、あなた自身のこれからの物語にとって、どのよう
な「新しい音色」をもたらしてくれると思いますか。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

新しく移住してきた人々の話を聞き、なぜ那須を選んだのかを知る。伝統的な文化と新しい文化が融合している場面に出会う。イベントやマルシェで、多様な背景を持つ人々との交流を楽しむ。自然の中で過ごしながら、那須が持つ魅力を体感する。自分が那須で過ごした時間が、那須の物語の一部になることを実感する。

カフェ・ ギャラリ

移住者やアーティストが「創り出す」心豊かな空間と時間を感じる。



ネットから

黒磯駅 周辺

古い建物を活かし、新しい感性で「心豊かな時間」を提案する空間を体験する。



ネットから

コミュニティ イベント

地元の人々と移住者が協働し、新しい物語を紡いでいる現場を体験する。



那須の マルシェ

玉藻の前伝説と松尾芭蕉の足跡が重なる、火山の息吹を感じる場所。



ネットから

アーティストの アトリエ

那須の自然に惹かれた人々が、インスピレーションを形にする現場に触れる。



個性的な 飲食店

那須を選んだ人々が表現する「豊かさ」の形を、食を通じて味わう。



ネットから

那須の 郷土民芸品

五十嵐豊氏らが創り出した、那須の自然や子どもたちをモチーフにした作品の温かさに触れる。





3 人の物語

那須の暮らしは、自然の厳しさを
知る人々が互いに手を取り合い、
「ここで生きる」という覚悟と喜びを
分かち合いながら育ててきた、
温かなコミュニティである。

居心地の良さの ストーリー

那須でふと出会う、人の温かさ。それは、この土地の「居心地の良さ」の、本当の源なのかもしれません。洗練された避暑地としての静かな佇まいと、時折すれ違う人々の穏やかな笑顔。それらが、まるで昔からここに根を張っていたかのように、ごく自然に存在しています。

しかし、この「居心地の良さ」は、ただ自然が与えてくれたものではありませんでした。火山という荒ぶる大地、そしてすべてを凍てつかせる冬の厳しさ。この土地で生きることが、その厳しさを正面から受け止めるという「覚悟」を必要としました。

だからこそ、人々は手を携えました。一人では越えられない困難の前に、互いの手のひらを合わせ、その温もりを分かち合ったのです。それは、古い別荘地を拓いた先人たちも、戦後に荒野を耕した開拓者たちも、そして今、この地を選んだ新しい住民たちも同じです。

彼らが「ここで生きる」と決めた覚悟と、それを支え合った絆。それこそが、何世代にもわたってこの土地に受け継がれ、育て上げてきた、目には見えない「温かなコミュニティ」という名の文化なのです。

あなたが今感じているこの温もりは、そうした無数の人々が分かち合ってきた喜びと、厳しい冬を越えたからこそ知る、手のひらの温もりそのもの。あなたは、この温かな輪の中で、誰と手を取り合いたくなるでしょうか。

テーマの目的

那須の現在の居心地の良さが、避暑地文化と、過酷な自然環境の中で知恵を絞ってきた先人たちの営みによって築かれてきたことを理解する。那須で暮らすことはその歴史と文化の主体者となることを実感する。



物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きかけたのは、那須の「居心地の良さ」という魅力が、実は「自然の厳しさ」と表裏一体であったということです。火山や厳しい冬という環境が、人々に「共に生きる」ための知恵と「覚悟」を与え、それが結果として温かなコミュニティという、何物にも代えがたい文化的な価値を生み出した。その歴史の連続性をお伝えしたいと考えました。

資源の解説

「御用邸や旧青木家那須別邸」に代表される「上質な別荘地」の風景は、那須の洗練された「避暑地文化」の象徴です。しかし、それと同時に、那須には厳しい「冬」というもう一つの顔があります。このテーマにおける本場の資源とは、その両極端な環境の中で育まれてきた、目に見えない「人々の絆」。人力で暮らしを築く人々の「協働」そのものです。さらに、獅子文六のような別荘を構えた文化人たちが、単に滞在するだけでなく、地元の人々と積極的に「交流」し、互いの文化を尊重し合った歴史も、那須の豊かさを形作っています。厳しい自然と向き合う人々の「協働」と、異なる背景を持つ人々（滞在者・移住者・地元住民）が織りなす「交流」。この二つが合わさった「温かなコミュニティ」こそが、那須の居心地の良さの源泉と言えるでしょう。

感じ取ってほしいメッセージ

那須の居心地の良さは自然が与えてくれたものではなく、多くの人々が時間をかけて築き上げてきた文化的な価値であること。那須の暮らしの温かさは、厳しい自然環境の中で「共に生きる」ことを選んだ人々の絆から生まれていること。那須で暮らす

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「あなたは、この温かな輪の中で、誰と手を取り合いたくなるでしょうか。」という問いは、あなたを「那須の暮らし」という物語の傍観者から、「温かなコミュニティ」を未来へと受け継ぐ「主体者」へと誘うためのものです。この土地の価値は、人が人との関わりの中で築いてきたもの。あなたが誰かと手を携えること、それこそがこの物語の新しい一歩となります。

自身が物語となる問い

先人たちは、厳しい自然の中で手を取り合い、この温かなコミュニティを築き上げてきました。それは、過去から現在、そして未来へと続く、終わりのない営みです。もしあなたが、この「暮らしの担い手」の一人となるとしたら、あなたは、この土地で育まれてきた「手のひらの温もり」を、どのように次の世代へと手渡していくのでしょうか。



テーマを感じられる 資源・体験

御用邸周辺や別荘地を歩きながら、上質な避暑地文化を感じ取る。地域の祭りや行事に参加し、住民同士の絆を体験する。冬の厳しさを経験した人々の話を聞く。地域の助け合いの仕組み、共同作業、情報交換、交流会などに参加する。地元の人々との対話を通じて、那須で暮らすことの意味を考える。

地域の 祭りや行事

共同体を維持するために人々が手を取り合い、喜びを分かち合ってきた「絆の温かさを体験する。



冬の 那須高原

観光シーズンとは異なる静けさと厳しさの中で、「ここで生きる」ことの覚悟と、それを支える人々の暮らしの知恵に思いを馳せる。



地域の コミュニティ スペースや

地元の人々と移住者が自然に集い、情報交換や交流を行う「温かなコミュニティ」の今を体験する。



農作業や地域 の共同作業 (那須地域)

厳しい自然環境の中で互いに助け合ってきた「結(ゆい)」の精神に触れ、共に汗を流す喜びを分かち合う。



地元の人々 との対話

移住者や長く暮らす人から、那須で暮らすことの「喜び」と「厳しさ」の生の声を聞き、その物語に触れる。



那須の 郷土民芸品

五十嵐豊氏らが創り出した、那須の自然や子どもたちをモチーフにした作品の温かさに触れる。





皇室が愛し地域からも愛された
那須のポテンシャル

④ 御用邸の物語



なす爺は自然大好き。
時間を見つけては虫眼鏡片手に動植物の観察に出かけるらしい。「新種を発見して自分の名前を付ける」のが目標で、今日も山歩き。那須の動植物を語らせたら右に出るものはいないらしい。

那須を大好きになるストーリー集





4 御用邸の物語

昭和天皇が生涯愛し続けた那須の自然は、地域の人々が何世代にもわたって守り育ててきた宝であり、その敬意と努力が御用邸という象徴の形で今も私たちに語りかけている。

愛された那須のストーリー

那須の森は、ただ静かなだけではありません。その木立を抜ける風、足元に咲く小さな花には、誰かの深い愛情がそっと触れているような、特別な温かさが宿っています。

かつて、この那須の自然を生涯愛し続けたお方がおられました。昭和天皇です。公務の合間にこの地を訪れ、森を散策し、植物や生き物たちに静かに心を寄せられました。その眼差しは、生物学者としてのものであり、同時に、この地の自然を深く敬う一人の人間としてのものでした。

しかし、その昭和天皇が愛した森は、ただそこにあつたわけではありません。それは、この土地の人々が、何世代も前から「宝」として、時には厳しい自然から守り、時には暮らしの知恵として共生し、大切に育ててきたものでした。人々は知っていたのです。この森こそが、那須の命そのものであると。

その地域の人々の静かな誇りと、昭和天皇の深い愛情。二つの想いが響き合う場所として、「御用邸」はここに在ります。それは、豪華な建物としてはではなく、自然への敬意と、人と人との信頼が交わる「象徴」として、今も静かにたたずんでいます。あなたが今、この森の空気を吸い込むとき。その清らかさの奥に、この宝を守り抜いた人々の息吹と、ひとつの優しい眼差しを感じる事ができるでしょうか。

テーマの目的

御用邸が単なる建物ではなく、地域の人々の努力と皇室の敬意が交わる那須の象徴であることを理解する。



物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語でお伝えしたかったのは、「御用邸」という存在が、単なる天皇御一家のご静養の地という側面だけではなく、那須の自然を核とした二つの想いが出会う場所であった、ということ。一つは、昭和天皇の那須の自然への深い愛情。もう一つは、その自然を何世代にもわたり守り育ててきた地域の人々の誇り。この二つの敬意が響き合ったからこそ、那須の自然は今も輝きを失っていない。御用邸はその関係性の美しさを物語る「象徴」として描かれています。

資源の解説

この物語を象徴する資源は、那須御用邸そのものと、その設立の経緯に深く刻まれています。那須御用邸の歴史は、1923年(大正12年)に始まります。当時皇太子であった昭和天皇が初めて那須の地を訪れ、那須連山が織りなす山々と高原の壮麗な景観に深く感銘を受けられたことが、すべてのきっかけでした。その後3年後、昭和天皇が即位された年でもある大正15年(1926年)7月、夏の避暑地として那須御用邸の本邸が完成しました。これは現存する御用邸の中で最も古いものです。生物学者でもあられた昭和天皇は、那須御用邸を「生物研究の拠点として毎夏のご滞在中、森を歩き植物の調査を続けられました。その情熱は、栃木県の絶滅危惧種である「ナスビオウギアヤメ」の発見と命名とつながり、ご自身の著書「那須の植物誌」の序文には、「毎年、夏を那須で過ごす。中略それをしあわせとして、付近の自然を楽しむことになっている。」と、その深い愛情を記されています。この天皇御一家と那須の自然との結びつきは、次世代にも受け継がれています。愛子内親王殿下のお印であるシロヤシオ(ゴヨウツツジ)も、那須の山々を彩る花の一つです。そして、平成の時代に入り、当時の天皇陛下(上皇陛下)のご意向で、御用邸の敷地の約半分(約560ヘクタール)が「国民が自然にふれあえる場」として環境省に移管され、「那須平成の森」として開園しました。「那須御用邸」の敷地の一部であった森として、現在は一般に開かれていた「那須平成の森」は、このテーマを最も色濃く体感できる場所です。そこは、昭和天皇が愛した手つかずの自然が残る森であると同時に、地域の人々が大切に守ってきた森でもあります。御用邸という存在が、この貴重な自然を未来へ受け継ぐための、大きなきっかけとなったのです。森を歩くことは、二つの想いが紡いできた歴史の上を歩くことでもあります。

感じ取ってほしいメッセージ

昭和天皇の那須への深い愛情。地域の人々が代々守ってきた自然への誇り。皇室と地域の人々の間に生まれた信頼と敬意の関係性。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「その清らかさの奥に、…感じる事ができるでしょうか。」という問いは、あなたに、目に見える風景の「奥」にある物語を感じていただくためのものです。那須の森の美しさは、人々の「意志」と「愛情」の結晶です。その事実が気づくとき、あなたは単なる訪問者から、その価値を受け継ぐ物語の「主役」の一人

自身が物語となる問い

昭和天皇が愛し、人々が守ってきたこの「宝」である森。もしあなたが、この森から一本の木を未来に残すとしたら、そこにどんな想いを込めますか。そして、あなた自身は、この森の物語から何を受け取り、明日へとつないでいくでしょうか。



4 御用邸の物語

テーマを感じられる 資源・体験

御用邸周辺の自然を観察しながら、昭和天皇が愛した理由を想像する。地域の人々が守ってきた自然の美しさに気づく。皇室と地域の人々の関係性に思いを馳せる。自分も那須の自然を大切にしようと思う。

那須 平成の森 (那須町)

かつて御用邸の一部であった森を歩き、昭和天皇が愛した豊かな自然と、守られてきた命の息吹を体感する。



那須高原 ビジター センター (那須町)

御用邸と那須の自然との関わり、地域の歴史について学び、物語の背景を知る。



那須地区における インタープリテーションの目的

インタープリテーション全体計画は、その地域でインタープリテーションを行う上での楽譜となるものです。音楽には、メロディーやハーモニー、リズムなど、様々な要素があるように、地域にも自然や歴史、文化など、たくさん大切な要素があります。楽譜がそれらの音楽要素をまとめて一つの素晴らしい曲として表現するように、インタープリテーション全体計画も地域の様々な要素を二つの響き合う物語としてまとめています。

インタープリテーション全体計画は、地域の中にある大切なものや魅力的なものを見つけ出し、それらをどのように伝えていくかという大きな方向性を示しているに過ぎません。二つ二つの場所や物の説明の仕方を決めているではありません。例えば、ある山の形や川の流れ、そこに暮らす生き物たち、そしてその自然と共に生きてきた人々の営みなど、様々な要素がどのようにつながり合い、その地域らしさを作り出しているのかを理解する手助けとなり、それらを伝えていくためのアイデアを考え出していく道筋となるものです。また、その地域に関わる様々な人たちが、同じ思いと目標を持ってインタープリテーションに取り組めるよう、その地域らしさを目指したい姿を示す役割も果たします。それは、演奏者全員が同

じ楽譜を見て、心を一つにして演奏するように、地域の人々が同じビジョンを共有しながら、それぞれの役割を果たしていくことを助けます。

さらに、この計画は、地域の魅力を伝える方法や考え方を、時代とともに少しずつ変化させていくことも考えに入れていきます。それは、同じ曲でも時代によって新しい解釈や演奏方法が生まれるように、地域の価値を伝える方法も、社会の変化に合わせて柔軟に進化させていく必要があるからです。

このように、インタープリテーション全体計画は、地域のインタープリテーションをより良いものにし、長く伝え続けていくために必要な考え方のプロセスを示すものと言えます。それは単なる計画を書いた紙ではなく、地域全体でインタープリテーションを実践していくための楽譜のような役割を果たすのです。この楽譜があることで、地域の人々が協力し合いながら、訪れる人々の心に響く素晴らしい物語を奏でられることを目指しています。

インタープリテーション全体計画とは今みなさんが手にしているこの「那須を大好きになるストーリー集」のことなのです。

インタープリテーションとは

私たちの周りには、美しい自然や歴史ある建物、大切に受け継がれてきた文化など、たくさん魅力的な資源があります。インタープリテーションは、そういった資源が持つ本当の価値や意味を訪れる人の心に深く届けることです。例えば、山に咲く一輪の花を見たとき、「きれいな花だな」と思うだけでなく、「なぜこの場所にこの花が咲いているのか」「この花は周りの自然とどんなつながりがあるのか」という物語を知ること、その花への理解が深まり、より心に残る出会いになります。

インタープリテーションは、単に情報を伝えることではありません。その場所にしかない特別な物語を、訪れた人自身の経験や感覚と結びつけながら分かち合うことで、「なるほど」「だからなのか」という気持ちで地域の再解釈を生み出します。それは、目の前にあるものの表面的な説明ではなく、その背景にある深い意味や、他のものとのつながり、そしてそこに込められた価値を伝えられたからです。そうすることで、訪れた人は単なる「見学者」ではなく、その場所の物語を共有する「参加者」となります。また、インタープリテーションは、訪れる人それぞれの感じ方や考え方を大切

にします。同じ場所でも、人によって異なる発見や感動があつていいのです。大切なのは、その場所と個人的なつながりを見つけ、自分なりの解釈を深めることです。

このように、インタープリテーションは、場所が持つ深い意味や価値を、人々の心に響く形で伝え、共有することで、一人ひとりにとってかけがえない経験を生み出すものなのです。

那須インタープリテーション全体計画-vol.1 参加人数00名

インタープリテーションの理解と
地域資源・体験の発掘

1回ワークショップは、地域の皆さんにインタープリテーション(IP)の概念を理解してもらい、那須の持つ豊かな資源や体験と一緒に発掘することを目的としました。特に、地域主体での取り組みの重要性とその想いを共有することに重点を置くワークショップとしました。



那須インタープリテーション全体計画-vol.2 参加人数00名

資源の深掘りと物語として
伝えるテーマ文

2回ワークショップの内容をみなさんにシェアしたいと思います。このワークショップでは、那須の魅力をもっと深掘りし、地域全体でその魅力を発信していくためのアイデアをみんなで考えました。テーマは「不足する資源・体験の発掘とテーマ文の試作」。なんだか難しそうに聞こえるかもしれませんが、実際はとても楽しく、充実した時間を過ごすことができました。



那須インタープリテーション全体計画-vol.3 参加人数00名

テーマとは何かの再共有と
テーマ文の精査

今回は那須地域のインタープリテーション全体計画に関する第3回ワークショップについての報告です。このワークショップでは、地域の皆さんと一緒に「ロードマップの共有」と「テーマ文の精査」を中心に話し合いを行いました。どんなことをやったのか、どんな成果があったのかを、お伝えします。



那須インタープリテーション全体計画-vol.4 参加人数00名

今までの総括と今後の活動を共有

那須IPチームがほぼ組み立てを行った第4回ワークショップは今まで行ってきたワークショップの総括となるワークショップとなりました。これまでの活動を振り返りながら、未来に向けた新たな一歩をみんなで考える場となったワークショップの様子をご紹介します!

